酒井多賀志記念事業ニュース No 4　　2023-09

記念事業事務局　〒192-0914　東京都八王子市片倉町 703－3
TelFax.　042-637-1345（留守電にはご用件と連絡先を入れて下さい。後ほどお電話さしあげます）
Mail　s.takashi@orgelkunst.org　　Web サイト　http://orgelkunst.org/
（オルガニスト酒井で検索できます）

猛暑と台風続きの夏でしたが、各地で祭りや花火、音楽の催し等も復活し、久々の活気が戻って参りましたね。みなさまいかがお過ごしでしょうか。最近の動きなどお届けいたします。

《酒井多賀志追悼　第 27 回マンドリン音楽祭》

2023 年 9 月 17 日、秋田市のアトリオン音楽ホールにて、平丈恵（たいら・ともえ）さん主催の音楽祭がおこなわれます。平さんは長年酒井と共演を重ねられたマンドリン奏者。以下平さんからの*メッセージ☆*です。

☆今年は Bach の再来を思わせるオルガニスト酒井多賀志追悼ステージを設けました。

関西からは、宝塚マンドリンギターオーケストラ指揮者の恩地早苗先生が「オルガンとマンドリンオーケストラの為の協奏曲」を客演指揮、２部のゲスト　ステージでは神戸在住の 19 世紀ギタリスト、西垣正信さんによるバッハ作品の演奏。

関東からは、東京在住の酒井先生のお弟子さん２名が、酒井作品のソロ（流離、一陽来復）と、マンドリンオーケストラとの共演（紅葉をめぐって）、そして千葉から、テノール～カウンターテナーの幅広い音域をもつ大久保豊典さんとマンドリンオーケストラとの共演。なんと豪華なステージ。天に召された酒井先生が、微笑んで聴いて下さるとうれしいです。それは、20 年もの長い間、秋田の地で演奏活動をされてきた方への、ささやかなご恩返し。秋田の皆さんと一緒に、追悼したいと思っています。

心より、ご来場をお待ちしております。

《平山の集い　開催》　次回は 10 月 8 日（日）午後

同じく秋田在住の平丈恵さんからの*呼びかけ☆*に応じて、酒井門下の有志が、3 月 21 日と６月 11 日の２回、平山のクラヴィーア音楽研修所に集まりました。https://orgelkunst.org/clavier

☆酒井先生が天に召されて３年余り、コロナ禍で思うように集まれませんでしたが、やっと時節がめぐって参りました。私たち、酒井先生の音楽に接した人たちが集い、酒井先生の思い出を語り合い、その音楽を聴いたり演奏したりする場を持ちたいと思います。酒井先生の作品を、バッハの作品ように、100 年、200 年先の未来へ引き継ぐための、ささやかな活動を、皆で続けていければ幸いです。

※当日は９名ほどが集い、演奏会の録画を見たり、持ち寄ったオルガン曲を演奏したり、久々の出会いを楽しみました。また今後の酒井作品を中心としたオルガン演奏活動について、提案がありました。

まずは「オルガニスト酒井多賀志の世界をめぐる vol.1～マンドリンとオルガンの世界～」を開催予定です。

日時　2023 年 12 月３日（日）午後２時開演予定

場所　松本記念音楽迎賓館　（世田谷区）　　＊詳細が決まりましたら、Web サイト等にてお知らせします。

《YouTube 新チャンネル開設》

長年酒井に師事された水村裕一さんが、５月に新たなチャンネルを開設されました。
「酒井多賀志記念事業」（新名称募集中）　https://www.youtube.com/@user-ir4pw6mq4f
酒井の自主企画リサイタルのライブ演奏を中心に、当面は、オール・バッハプログラム（No.12,14,16,27,43）より、順次アップしていきます。曲目ごとに区切られ、お好みの曲がすぐにお聞きいただけるようになっています。どうぞお楽しみ下さい。

連　載

《オルガニスト・作曲家　酒井多賀志のあゆみ》回想（２）　　酒井正子

酒井はひらめきの人で、音楽活動の潮目も 10 年サイクルで変化していきました。
バッハ・フランクを軸とした古典～現代、バロック、そして自作自演や各種アンサンブルによる「世界音楽」へ。一見不連続なその軌跡は、彼の中では一貫した筋道が描かれるようです。しかしその全体像を知る人は決して多くはないでしょう。私（妻・正子）は最も身近でその変遷を見聞きしてきた一人として、僭越ではありますが、彼の音楽的軌跡をたどってみようと思います。
いかにしてオルガニストとして形成され、いかなる表現をめざしてきたのか。彼のメッセージやインタビューを交えて、前号からこの回想記をスタートさせました。
　章立ては、おおむね以下のように考えています（紫文字は作品の略称）。
（１）オルガン前史；リードオルガンからの出発、オルガニストを志しカトリック吉祥寺教会を訪ね受洗。
（２）1970 年代；芸大院在学中に万国博オルガンコンクール最高位入賞、以後演奏活動を開始。カテドラル・シリーズの充実、日本の主要な音楽家・演奏団体と共演、この分野の第一人者としての評価を得る。
（３）1980 年代；転換期、作曲開始。シュトゥルム＆ドゥランク（疾風怒濤）の時代。
　「光と風と波の心象」（1982）、「流離」（1985）等、自由で瞑想的、幻想的な作風。
　★シュトルム合唱団・合奏団の指揮、チェンバロ演奏をとおして、バロックの探求。
　★尺八・箏とのアンサンブル開始(1987～)。
　★1984 年武蔵野市民文化会館、89 年純心江角記念講堂、91 年府中の森芸術劇場のパイプオルガン設置に尽力。
（４）1990 年代；作曲充実期。身近な五音音階のテーマを使った変奏曲やフーガを作曲。
　「赤とんぼ」（91）、「アメイジング・グレース」（96）、「故郷」（97）、「夕焼け小焼け」（98）など。
　★マンドリン（1990～）、奄美島唄（92～）とのアンサンブル開始。
　★98 年よりデジタル・オルガンを軽ワゴン車に積み込み、出前コンサートを開始。
（５）2000 年代；即興・変奏曲・フーガという三つの様式を組み合わせ、規模の大きな曲に取り組む。
　「イントロダクションとフーガ」（2001）、「さくらさくら」（03）、「我は海の子」（05）など。
　★全国各地に出前コンサートを継続。
（６）2010 年代；歌やマンドリン、邦楽器とのアンサンブル曲に力を入れる。
　★自主企画リサイタルの終了（No.50、2011 まで）。デジタル・オルガンを使った小金井コンサート（2012～）、平山クラヴィーア音楽研修所の設立とホームコンサート開始（2017～）。
　「クリスマスの為の前奏曲とフーガ」（2014）、「一陽来復」（17）。
　◎彼はバッハ・フランク等の古典と自作品を並べ、ともに響き合うようなプログラムを組んできました。「和洋の融合」に心を尽くしてきたのです。その軌跡は、日本近現代に於ける「洋楽の受容と新たな音楽の創造」という、文化史的にも興味深い問題を提起しているように思われます。

＊　＊　＊　＊　＊

今回は（２）1970 年代を中心に、様々なエピソードを綴ってみましょう。☆は引用（要約）、青字リンクはご参考までにあげました。

【1966 年４月、東京芸大オルガン科入学】

＜練習方法をめぐって＞

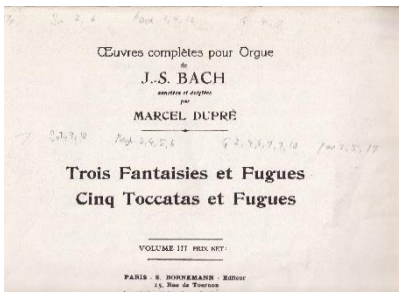
☆芸大を受験することを決め、ともかくむきになって練習した。特に入試前１ヶ月などは１日 10 時間の練習をしていた。入学してからもこのやり方をとおしたため、３年生の時にスランプに陥ってしまった。様々な目標をたてて練習するにもかかわらず、その目標がいっこうに達成されない。「もう仕方ない、やるだけやってだめならオルガンをやめよう」と思い、やはり１ヶ月間ほど１日 10 時間の練習を続けた。

そんな時、ピアノ教師カール・ライマーが書いた本の中に「練習のやり過ぎは一番悪い」とあるのが目にとまった。練習して成果があがった時にパッとやめると、良い時の状態が頭の中にインプットされる。だが更にやって調子が落ちてからやめると、悪い状態がインプットされてしまう。だから一番良い時にやめる勇気が必要だ、というのだ。

「これだ」と思い、以後１日３時間以上は弾かないことにした。結果、自分にとっては 20～30 分の練習を一日３，４回するのが一番良い、ということがわかった。

☆目白の東京カテドラルのような大オルガンと出会った時には、新しい問題にぶつかった。

残響が長く（空席時は７秒に達するといわれる）、自分が弾いている音が実際聞こえてくるまでに、かなりの時間がかかる。それまでは自分の弾いた音を耳でよく聞いてコントロールしていたが、そのやり方が通用しない。



この時は、仏のデュプレがバッハの全作品について克明に指使いをふった楽譜をみつけた（左写真）。指使いを徹底して合理的に考え、様々な課題を解決していく技術がそこに示されていた。　［デュプレ譜　フーガヘ長調］

いついかなる時も自分はこの指使いでこのキイをおすという確信が、大オルガンの演奏では最も頼りになる。以後私も自分なりの指使いを考え続けている。［一陽来復フーガ　江角講堂用のレギスター付箋入り］

※以上 89 年 int.article_02.pdf (orgelkunst.org)より。

【1970 年４月、芸大院進学】

４月２～3 日、日本初のオルガンコンクール（万博記念）に最高位入賞（１位該当者なし、２位は草間美也子さんと酒井）。全国から 26 名参加、最終予選に８名残り、課題曲はバッハのトリオ・ソナタ第三番だった。

５月に受賞記念リサイタル、以後演奏活動を開始。

71 年３月、「カテドラル・オルガンの夕べ」に初出演、以後レギュラーメンバーとなる。

７１年２月小沢征爾指揮・日本フィルほか、主要な音楽団体と共演、また各地のオルガン演奏に招かれる。当時はソロから共演まで出演依頼が殺到し、年間 300 回近く演奏会をこなしたこともあると聞く。

72 年３月、院修了。修論はバッハ「クラヴィア練習曲集第三巻」（演奏＆論文）。

【学外での研鑽と出会い】

69 年ころより、彼は芸大の外の様々な活動に加わるようになる。これは将来の布石として重要な意味を持つ。

以下の２団体には筆者（正子）も学生として深く関わっていたので、当時を思い起こしつつ述べてみたい。

◎バッハゼミ→バロック音楽研究会
東大駒場では、教養部の１，２年生を対象とした全学教養ゼミが花盛りであった。
私は畏友中井（中村）章子さん（独文学専攻）とともに、杉山好先生のバッハゼミ設置を要望して署名活動をおこない、68 年（２年次）に首尾よく開設された。
杉山先生はルターや聖書研究・シュバイツアーの翻訳等で知られる、情熱あふれる碩学の師。ゼミではバッハのカンタータをテキストに、歌詞の解釈や象徴表現、作品の位置づけなど、噛んで含めるように丁寧な教えを受けた。バロックブーム到来の頃で［メッセージ D／バッハ没後 250 年を記念してバロック音楽について（2000)]、次々と出される新解釈の LP レコードを聴くのも楽しみだった。学生のリーダー格には磯山雅（いそやま・ただし）さんがいて、その博識ぶりにも驚かされた。
ところが開設２ヶ月にして、６月東大闘争勃発、授業閉鎖。混沌とした中 69 年１月安田講堂陥落、闘争は終息に向かう。69 年秋には授業開始、ゼミも再開された。酒井はその頃からゼミに参加するようになったと思う。というのはガラスの割れた教室で、酒井を紹介された覚えがあるからだ。彼によれば「ゼミ」という学習の場を初めて知り、各自の問題関心にもとづく自主的な発表と自由な討論は、「いいなあ」と思ったという。
ゼミは 70 年３月でカリキュラムとしては終了するが、４月より磯山氏を中心に武蔵境の市川信一郎氏宅で「バロック音楽研究会」として 72 年ころまで続く。vln の広瀬悦子・山田茂俊さん他、演奏家や美学・音楽学の方たちも参加され、様々な広がりがあった。

◎東大古典室内合唱研究会→Vox　Polyphonica と改称
ルネッサンス期のアカペラの合唱曲を歌う合唱団として、68 年４月に発足。当初は磯山氏も参加、女声は東京女子大生も加わった。69 年まで創立者（医学部学生）が指揮、学業多忙で退いた後、礒山氏の紹介で 70 年春から酒井が指揮者として招かれる。パレストリーナ、ジョスカン・デ・プレ、ヴィクトリア等、ポリフォニーのみずみずしい魅力を発見。ジャヌカンなど仏シャンソンは、篠原敏修氏が担当した。
私は 70 年４月に駒場の教養学科（文化人類学）に進学、71 年にこの合唱団に入団する。それまでバッハのロ短調ミサ曲やマタイ受難曲等をうたってきたが、大人数の合唱に飽き足らず、新たに参加した１０数名のアンサンブルは、一人一人の声のからみ合いがよく聴こえてきて新鮮だった。
教養学科には主専攻と並んで副専攻という制度があった。私は音楽を副専攻とし、角倉一郎、海老沢敏、皆川達夫氏等の講義を受講でき、在学中は音楽三昧だった。
72 年１月、東京文化会館（小）で Vox　Polyphonica の演奏会を終え、３月卒業後は、多くのメンバーが酒井指揮のシュトルム合唱団@吉祥寺教会に合流した。そして酒井と私は、６月に名古屋南山教会にて挙式。彼が洗礼を受けた後藤文夫神父が司式をして下さった。

【シュトルム宗教音楽研究会@吉祥寺教会→シュトルム合奏団･合唱団】
彼がオルガニストを務める吉祥寺教会で、71 年4月より自主企画のコンサートシリーズが開始された。オルガン音楽のほか、バッハのカンタータや古典合唱、バロックの室内楽等、これまでの研鑽を生かしたプログラムを組んで第7回までおこなわれた。
しかし 73 年 12 月、クリスマス音楽会の直前に、聖堂の火事によりオルガンが損傷[メッセージ O(2012)]。75 年より教会を出て、ICU、フランシスカン･チャペルセンター、山手教会、石橋メモリアルホール、聖アンセルモ教会、武蔵野市民文化会館(小)等を会場に、シュトルム合唱団･合奏団主催で演奏活動を継続。1991 年まで続けられた。[→次号]

【カテドラル･シリーズの盛況と、実況録音 LP レコードの発売】

◎1974 年（26 歳）より、個人リサイタル・シリーズを開始する。これは画期的な試みであった。
当時パイプオルガンは、教会の礼拝で聞くことはあっても演奏会は少なく、会場（楽器）も限られていた。酒井は明確な音楽的意図により、自主企画のシリーズを東京カテドラルにて開始。６月にバロック篇、11 月にロマン篇と内容を分けて、年２回づつ継続してゆく。バッハ以前の作品は職人のもの、バッハ以後は芸術家のものであって各々性格が異なり、その接点にバッハがいる、という考えであった［メッセージ K］。**「この両者は私にとっては、どちらも捨て難い魅力を持つものであるし、又現代においてはこの二つの態度が対等に存在する所にこそ、未来の可能性が産み出されてゆくように思われる」**とプログラムで述べている。
その幻想的でのびやかなオルガンの響きは好評を博し、1500 人の聴衆を収容しきれず、翌年からは二日間に分けておこなうようになった。1980 年６月の No.14 まで、この二日間開催は続けられた。
当時の酒井の活躍を音楽誌は以下のように報じている。
☆・・・特に 74 年からは自主企画のシリーズで、バッハを中心に古典から現代まで幅広いレパートリーをとりあげ注目されている。またオルガンのみでなく、チェンバロ演奏、さらに 72 年以降シュトルム合奏団・合唱団の指揮者としてバロックの合唱曲やカンタータを手がけるなど、広い分野での演奏活動もつづけており、近年急速な発達をみせている日本のオルガン界でもっとも期待される存在のひとりだ。［音楽の友、79 年３月号］

実況録音 LP レコード Vol.1

◎79～81 年には、カテドラルのライブ演奏より選曲して、実況録音シリーズの LP レコード４枚を発売。「演奏活動の最初期からの継続であり、そこには私がオルガニストになろうと決心した最初の感動が脈づいている」このシリーズは、各方面から高い評価を得る。
・ダイナミックな力感にあふれた演奏芸術／激しい気迫と妥協を許さぬ厳しさで、聴く者を圧倒（ジャケット解説・磯山雅）
・誠実で堂々たる音楽づくり（バロック音楽の楽しみ・皆川達夫）
・テクニックの背後にある、ある種の確固たる音楽観が生き生きした演奏をつくりだしている。（音楽旬報）
・作品に没入した若い演奏家の無心の境地が美しい。（音楽旬報）
・折り目正しく音楽を捉え、オルガンの性（さが）のようなものをごく自然に掌握（音楽現代）
・演奏者の音楽に対する並々ならぬ情熱が自然とにじみ出てくるようで、それが聴く人の心を捉える（音楽の友）
［詳しくは実況録音 LP 評参照］

【1970 年代の終わりに】
◎1977 年、東大駒場 900 番教室に、火災で水を被った吉祥寺教会のオルガンが補修、移設された。杉山好先生を中心に設置の運動がすすめられ、学内に「オルガン委員会」が組織された。
５月７日の竣工記念演奏会では、酒井のオルガンと淡野弓子氏指揮「シュッツ合唱団」が共演した。
◎1978 年秋、酒井多賀志公演会発足
オルガン・指揮・チェンバロと多岐にわたる酒井の自主公演をとりまとめる主催母体として発足し、終生続く。当初 10 年あまりは会員制度をもうけ、演奏者との対話集会もおこなわれた。
◎1978 年２月、CBS ソニーより LP アルバム「バッハ讃仰」発売（写真右）。
諸井誠の新曲「J.S.BACH の名による幻想曲とフーガ」ほか２曲を、最新の録音技術で収録。新曲の初演は 1978 年５月 21 日、ICU チャペルでのリサイタル「バッハの名前による作品の特集」でおこなわれた。諸井誠氏によれば；

☆・・・JoHAn SEBAStiAn BACH のフル・ネームの中、大文字のドイツ音名 H-A-S-E-B-A-S-A-B-A-C-H を抜き出して作った 12 音の音列（S=Es）に基づく主題による複雑なフーガは、決して易しくない。それをバリバリ弾いて

のける酒井君の腕前にはすっかり感心させられたが、さらに驚嘆したのは酒井君のリサイタルであった。
日曜日の昼下がりの教会。春の日差しが簡素なステンドグラスを美しく浮き立たせる清潔な会場で、酒井君は、私の曲に引用されている B-A-C-H 主題泰西オルガン名曲、バッハ（フーガの技法）・シューマン・リスト・レーガーなどの原曲を立て続けにひいてのけ、プログラムの終わりに拙作を初演したわけだが、その意欲と演奏の仕上がりの良さには感嘆させられた。「日本にもいつの間にかこんな素晴らしいオルガニストが育っていたんだね。」一緒に聞いていた渡部君（Sony プロデューサー）に、思わず私はそう言わずにはいられなかった。・・・
この曲は、東京カテドラルのオルガンで録音され、国際基督教大学のオルガンで初演され、NHK ホールの大オルガンで初放送録音された幸運児である。これらの経験を通じて、演奏者が一人の人で一貫していても、楽器によって著しく違った印象があたえられることを痛感させられた。・・・

［諸井誠「オルガンとわたし」より、1979.3.16］

◎1979 年頃、「コンサートでバッハの曲を弾いている最中に、フッと自分はこの先何回バッハのこの部分を通過するのだろうかと考えてしまい、無性にいやになってしまった」[article_02.pdf (orgelkunst.org)]。そして「日本でヨーロッパ音楽中心に演奏することの物足りなさや、疑問がわき起こり始め、それは日に日に大きくなっていった」と語っている。[メッセージ B (1999)]

＊　＊　＊　＊　＊

次回は自作自演にふみきった 80 年代に焦点をあててみましょう。

《記念事業の活動　22 年９月～23 年８月》

●ライヴ音源の保全とデジタル化；
三塚幸彦氏のご尽力により、カセット・テープ、DAT の音源のデジタル化はほぼ終了しました。
●楽譜；
オリジナル作品のデータの保全、整理を継続中。国内外から注文があり、楽譜をご注文の方には、酒井の生前からの遺志を引継ぎ、自筆の運指譜もお分けしています。
また、お弟子さん方のご協力を得て、バッハ・フランク等、生前演奏していたオルガン曲についても、自筆で運指をふった楽譜を後世の方の参考にしていただけるよう整理しています。お弟子さん方のご希望により、長年使い込まれ愛用してきた運指譜の原本を、クラヴィーア音楽研修所にて自由に閲覧していただけるよう準備を進めています。年末には準備が整う予定ですので、皆さんの音楽活動にご活用いただけたら幸いです。
ご希望の方には実費にてコピーをお分けしますので、事務局までご連絡下さい。
●ＣＤの価格改定；リサイタルＮｏ３，４，５，６は、在庫豊富につき 2,000 円、それ以外のＣＤは一律 2,500 円として、お求めやすくいたしました。
＊在庫稀少（数枚程度）、少（20 枚程度）のものもございます。詳しくは Web サイトでご確認下さい。
●クラヴィーア音楽研修所と楽器の保全管理
研修所利用にあたっては登録が必要です。Web サイトよりお問い合わせ下さい。
22 年５月より登録者は、イベント使用料、オルガン貸し出し料を 50%引きとしてご利用しやすくしました。
楽器のメンテナンスも随時おこなっています。
●協賛活動；酒井作品を取り上げた演奏会・関連企画に対して、HP に掲載するなど広報に協力しています。
ご関係の方は事務局までご一報ください。

《Youtube「酒井多賀志公演会　記念事業」チャンネル》　新規公開　22.10～

♪2022/10/05 公開

・https://youtu.be/0P1g26iv348　【酒井多賀志オルガンリサイタル・秋田 No17＜第一部＞】@アトリオン音楽ホール　1994.5.21　コンサート・フル映像　☆夏の思い出、バッハ、典礼聖歌、ヴィドール

・https://youtu.be/rlHocawbzds　【酒井多賀志オルガンリサイタル・秋田 No17＜第二部＞】@アトリオン音楽ホール　1994.5.21　org／T.Sakai　コンサート・フル映像　☆秋田民謡による幻想曲、デュプレ、曙光、メシアン☆

♪2022/10/06 公開

・https://youtu.be/myVAjUMkeUk　酒井多賀志：秋田民謡による幻想組曲 op.34☆ひでこ節、姉こもさ、秋田長持唄、秋田節、ドンパン節☆　1994.5.21@アトリオン音楽ホール

・https://youtu.be/HlqtZE2F1mE　酒井多賀志：交響的幻想曲『曙光』より「歓喜の歌」　1994.5.21@アトリオン音楽ホール　☆激しい暗闇に耐え、迎えた夜明けの＜曙光＝希望＞と歓喜！

♪2022/12/06 公開　★季節の音楽；待降節に

・https://youtu.be/Pq4QHdSSGos　酒井多賀志：クリスマスのための前奏曲とフーガ Op.68（2013）Prelude and Fugue on “Nativitate Domini”　前奏曲「やみ路になやめる」、フーガ「Adeste fideles」

♪2022/12/07 公開　★季節の音楽；クリスマスの夜

・https://youtu.be/5CtBktjB7Rw　酒井多賀志：雪の教会クリスマス　Op.63（2011）　詞：北原白秋　曲・Org/Takashi SAKAI　Sop/十日谷正子　☆キャロル風に☆

♪2022/12/08 公開　★三周忌を記念して

・https://youtu.be/AHf-GBDEuJM　酒井多賀志：組曲【オルガンへの招待】Op.29 @府中の森芸術劇場ウィーン・ホール☆オルガン披露コンサート　1991.7.2　曲・Org／Takashi SAKAI　＊ナレーション付き

♪2023/3/25 公開

・https://youtu.be/PsLIbCyU3IQ　酒井多賀志リサイタル　＜第一部＞；オルガン披露コンサート@府中の森芸術劇場ウィーン・ホール 1991.7.2　Org／Takashi SAKAI＊3 回にわたるこけら落とし初日・フル音源
☆酒井多賀志：組曲「オルガンへの招待」Op.29、バッハ：小フーガト短調、主よ人の望みの喜びよ、パッサカリアとフーガハ短調☆

・https://youtu.be/iDW2HE7CX1Q　酒井多賀志リサイタル　＜第二部＞－オルガン披露コンサート@府中の森芸術劇場ウィーン・ホール 1991.7.2　Org／Takashi SAKAI【Opening concert@Fucyu（２）】＊同上☆メンデルスゾーン：オルガン・ソナタ No. 6 ニ短調、ヴィドール：オルガン交響曲 No. 6 ト短調 、ヴィエルヌ：アラベスク Op.30-15 、酒井多賀志；光と風と波の心象 Op.3（1982）、赤とんぼの主題による変奏曲 ☆

・https://youtu.be/E_-SRyUO9GM　酒井多賀志：光と風と波の心象 Op.3（1982）　Takashi SAKAI：Images of Light、Wind and Waves；Symphonic Improvisation

♪2023/08/31 公開

・https://youtu.be/NSWR9jwxbN4　F.メンデルスゾーン：オルガンソナタ第 6 番ニ短調　Org：酒井多賀志 Takashi SAKAI　1991.7.2@府中の森芸術劇場

・★季節の音楽；夏の終わりに

・https://youtu.be/5SJZijy07cs　酒井多賀志(曲・Org)：「夏の思い出」による変奏曲　十日谷正子(Sop)／恩地早苗(Mandolin)　T. SAKAI：Variations over Memoris of Summer

＜今後の公開予定＞

・尺八・箏とのアンサンブル／奄美島唄との共演@大島郡瀬戸内町立図書館

・オリジナル作品コンサート／酒井多賀志指揮・チェンバロ；シュトルム合奏団定期演奏会

・季節の酒井作品；春、夏、秋、クリスマス、新年　等

《音　信》　お便り・コメントをお寄せ下さり有り難うございました。抜粋してご紹介します。

★23-3　水村裕一さんより
酒井先生のオリジナリティはバッハやフランクの演奏のみならず、御自身の曲の演奏が大きいと思います。
懐かしい日本の童謡や唱歌がパイプオルガンの変奏曲や音色でその魅力がより大きくなって新たな日本の曲として帰って来たと言うイメージをいつも感じているので、これは絶対に歴史的な遺作としてもその価値は大きいと思っています。
★23-1　森山紅子さんより
大オルガンを制御し、軽々と飛翔するかのごとく魂そのものを天に描くことのできる演奏家は世界でも稀です。その演奏は精緻でありながら大胆、先生の構築された音の大伽藍はもしかしたら画家としての視点も加味されていたのでしょうか。
創造的な先駆者であるという点ではご苦労もあった事でしょうが、未来を見据えた先生の自由で公平な視点は心から共感いたします。
私は真の天才の側に身を寄せていたことが、今ならはっきりとわかります。幼子を慈しむ様に穏やかで明るい語り口の中に、分け隔てなくレッスンを受けた幸福な時間を思い出します。
★22-12　紀善之さんより
今日お寺でクリスマスコンサートを聞いてきました。
（YouTube 上の）多賀志先生の（クリスマス音楽の）オルガンは力強く迫力があり音が素晴らしく感じられます。３回聞きましたが何度聞いても心が興奮してくるような思いがしました。繊細でまた音の広がりがあり、何度聞いても心が和みます。
生演奏が聞けなくなったのは残念でたまりません。
お寺のクリスマスコンサートは弦楽合奏でした。人数が多くても迫力はオルガンにはかないません。
★22-10　YS さんより
早速「歓喜の歌」を聴かせて＆見させていただきました。
超絶技巧もさながら、多賀志さんの両手、両足、全身から発せられるオーラに、しばし沈黙！
★22-10　内田満開さんより
送って下さった『秋田民謡による幻想組曲 op34』『夏の思い出の主題による変奏曲 op37』は勿論ですが、『交響幻想曲「曙光」op28」も、『瞑想的即興曲「流離」op17』もとても日本的な感じ、例えば、木遣りを聴いているような日本的な感じで、何か常に祈りを感じました。心が静寂になったように思います。
『典礼聖歌に基づいた 3 つの小品 op18』を拝聴していて、今まで言葉としては気づいていなかったけれど、私はこれをやろうとしているんだ（聖歌と声明との違いですが）と思いました。
そのように思って聴くから尚更かもしれませんが、このオルガンからずっと風を感じていて、風の音楽だと思いました。とても感銘致しました。作曲の励みになりました。

[以上、ありがとうございました]

〈おことわり〉

「記念事業ニュース」はご縁をいただいた方にお送りしておりますが、今後お受け取りを希望されない場合はご提を中止致しますので、事務局までご一報くださいますようお願い申し上げます。
なおご提供されました皆様の個人情報は、第三者に預託、提供は致しません。